

可視化と検証

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

2024年はドジャースの大谷翔平選手が大活躍して50-50（ホームラン50本50盗塁）を超える大記録を挙げたことに沸いた年であった。大谷以外にも日本のプロ野球出身者が多数様々な球団で活躍しており、今後もFA宣言ののちに米国メジャーリーグを目指す若手がどんどん出てきそうな状況にある。日本のみならず韓国や台湾、キューバなどのリーグがマイナーリーグであるかのような様相もないではない。野球とは筆者もいくらか縁がある。大学4年になって研究室に配属された時、先輩たちからこの研究室は学内と学外の熱関係講座との間に野球の試合を抱えていて、一つは学内のヒート（Heat）杯、もう一つは後に筆者も所属する阪大の研究室とのボイラ（King of Boiler）杯があると聞いた。師匠も熱心で、研究室紹介で野球の試合のことしか話さなかったため、後に他の教授から怪しからんと文句を言われたとか。先輩からお前は体形が前任者とそっくりなのでキャッチャーをやれとのご命令。マスクとキャッチミットの生活が学部、修士と3年続いた。最初の試合では対抗チーム所属の友人からホームランを打ってから、その3年間は4番打者で通した。

筆者のことはさておき、メジャーリーグのTV中継を見ていて、画面中、キャッチャーの前にストライクゾーンを示す四角い枠が重ねられていたのに気が付いた。もちろんボール、ストライク、アウトの表示はなされているが、視聴者にもどんな球が投げられ、バッターがどんな球を打ったのか、空振りしたのかなどが非常によくわかる。と同時にこの枠は、審判の判断が直ちに妥当かどうか分かる仕掛けになっているともいえる。ゲームでは審判が進行を左右し、その意味でもその判断が重要なのは論を待たない。ゲームに最も影響を与える球審の判断は特に重要であり、その判断を視聴者が検証できる画面内の四角い枠の存在は、メジャーリーグのゲーム中のキャッチャー、バッターの判断はもとより審判の判断の可視化ともいえるのではないだろうか。当然グレーゾーンも出てくると思うが、それも含めての検証が可能になっている。一方、日本のプロ野球中継の画面では、そのような枠はほとんど見かけないように思う。判断は審判の専決事項であり、視聴者が検証することはなどといった行為は想定されていないように思える。

最近のスポーツのTV中継では、直後にスローモーションなど多用して、状況の振り返りが可能である。もちろん放送局に依存している部分はあるが。たとえば相撲では行司が野球の審判だが、それ以外に審判団の物言いがあり、更にはビデオという三重の体制をとっている。その意味で、野球の場合には球審、塁審がいるとはいえビデオと合わせて二重である。ただ、そうした検証も以前に比べればいろいろな場面で行われるようになってきたものの、日本のプロ野球においては、現場の監督が判定に異を唱えるときだけであるように思えてならない。何事もなければ何もしない。監督が何も言わないのに、いち視聴者がそんなこと知らなくてもいい、お上の判断に文句をつけるとは不屈き千万、とまでは言い過ぎか。でも人の判断には揺らぎもありグレーゾーンも存在する。したがって場合によっては間違ふことだってありそうだが、そのミスを目撃者にさらさないで、かば

い合うようなことになってはいないだろうか。視聴者がいなければプロ野球中継は成立しないのであって、ある意味視聴者もステークホルダーなのである。グレーはグレーとして認識し、場合によっては許容し、あるいはまたクレームも出せる体制こそが健全なあり方なのではと、つい我田に引き込もうとするのは筆者の悪い癖だろう。

それにしてもメジャーリーグは面白い。映画の“Major League”もとても面白い。子供の頃には稲刈りの終わった田んぼで手製のバットと、つるつるになった軟球で草野球に興じ、成長して4番、キャッチャーにまで成り上がった筆者としては、プロ野球をもっと面白いものに是非してほしいのである。

